



TITLE:

京大上海センターニュースレター 第268号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科上海センター

CITATION:

京都大学経済学研究科上海センター. 京大上海センターニュースレター 第268号. 京大上海センターニュースレター 2009, 268

ISSUE DATE:

2009-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/77721>

RIGHT:

京大上海センターニュースレター

第 268 号 2009 年 6 月 1 日

京都大学経済学研究科上海センター

目次

- 京都大学上海センター主催シンポジウム: 中国の環境問題と循環型経済への転換
- 「中国経済研究会」のお知らせ
- 残念！活かせなかった「東寧」の地縁
- 北京での「被隔離」記
- 【中国経済最新統計】(試行版)

+++++

京都大学上海センター主催シンポジウム 中国の環境問題と循環型経済への転換

世界経済の後退の中で、中国経済はいつそう目立った存在になっているが、その中国経済にも多くの問題があります。そして、その最大の問題は環境汚染の問題です。これが、今回の緊急経済対策でどうなるのか、あるいはもっと地道な努力がどう積み重ねられているのか。中国での環境ビジネスに関わっておられる専門家も交えて今回はこの問題を討論します。

日時 6 月 29 日(月) 午後 2:00-5:45

会場 京都大学時計台記念館 2F 国際交流ホール

報告者

楊 志 中国人民大学教授 「中国経済の循環型への転換の課題」

植田和弘 京都大学教授 「中国の環境問題と持続可能な発展」

藤原充弘(孝光) フジワラ産業株式会社社長 「『水』に関わる中国での環境ビジネス」

大野木昇司 日中環境協力支援センター有限会社取締役 「中国における環境ビジネスの進め方」

共催/京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、京都大学上海センター協力会

後援/北東アジア・アカデミック・フォーラム(予定)

なお、シンポジウムの後、無料の懇親会が予定されています。会場は未定。

「中国経済研究会」のお知らせ

2009 年度第二回目の研究会は下記の要領で開催されますので、ご自由に参加してください。

記

時 間： 6 月 16 日 16:30-18:00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館 108 演習室

報告者： 張冬雪 (京都大学経済学研究科)

テーマ： 「中国における農業ガバナンス・メカニズムの転換」

講師略歴：

2000 年 中国復旦大学卒業

2003 年 京都大学経済学研究科修士課程修了

論文：

Coordinating Units: The Farmers' Association in China's Agriculture—A Comparative Study of Organizational Design in Agriculture between China and Japan」 “Northeast Universities Development Consortium Conference2007”, International Development Center, Harvard University, Boston, US.Oct.2007.

後期：10月20日（火）、11月17日（火）、12月15日（火）、1月19日（火）

小島正憲

私はこの街に不思議な縁がある。しかしその地縁をビジネスに結びつけることができず、大儲けのチャンスを逃がした。

2001年8月、私は肖洪有先生の手引きでこれらの地点の調査を行うことにした。吉林省琿春市からバスでロ



シアに入り、スラビヤンカ、ウラジオストク、ウスリースクなどを経て、鉄道で中国に戻り、黒龍江省の綏芬河に抜け、東寧へ回り牡丹江へ帰る予定をたてた。中国側の工場作りについてはそれまでの体験上、どの街で工場を作っても大きな違いはないと思っていたので、詳しくは調査することはせず、未知のロシア側について重点的に調べることにした。

ウラジオストクやウスリースク周辺の工場を数か所見て回ったが、どこも古臭く薄汚れたところが多く使い物にはならないと思った。意外なことにそれらの工場の経営者はほとんど韓国人であった。また当然のことながら労働者はロシア人であった。韓国人社長たちは怠け者のロシア人をまじめに働かせるのは難しいとこぼしていた。私にもこれらのロシア人を働かせるのは到底無理なような気がしたので、韓国人社長に「中国人労働者を越境させ働かせることはできないのか」と聞いてみたが、「労働ビザを取得し多人数の中国人労働者を入境させるのは難しい」という返事だった。

ロシアでの工場調査は期待に反してかンばしくなかった。おまけにロシアのホテルで昼食に食べたスパゲッティにあたったようで下痢と腹痛に悩まされ、方法の体で綏芬河を通して中国に逃げ帰り、翌日牡丹江から上海へ飛んで戻った。だからこのとき結局、肖洪有先生の地元の東寧には行かなかった。しかも私はロシアの工場の印象があまりにも悪かったので、その後しばらくロシア生産のことについては考えたくなかった。したがって東寧の地で、このプロジェクトを積極的に進めようとしてくださった肖洪有先生の努力は徒労に終わった。ちょうど娘さんをはじめ家族のみなさんが先生の健康を心配され、これを潮時に退職をと言い出されたので、私は先生と別れることにした。先生は残念がられたが、なにしろ75歳を超えておられたので仕方がなかった。4年後、先生は脳溢血で倒れられ、右半身が不随になられたと聞いた。

その後の情報によれば、ウラジオストクから韓国企業がいっせいに逃げ出したという。資材輸入に関する税法が変わったのが理由ということだった。またしばらくしてその韓国企業の後に中国人が進出して、靴の生産をはじめ成功しているようだと言った。さらに中ロ国境貿易が活発となり、中国人の担ぎ屋がウラジオなどに進出し、短期間に大きく商売を伸ばしたようだった。ところがそれも束の間、中国人の進出を恐れたロシア人が、ウラジオ近辺での中国人の小売を禁止し、中国人の商売人を追い出したと聞いた。さらにロシア政府が中国に輸出していた原木に大幅な輸出関税をかけたので、これまた中国の木材関連企業が壊滅寸前に追い込まれているとの情報も入った。

これらの情報に接して私は、「韓国人や中国人でもロシアビジネスは難しいのだから、ましてや日本人では到底できないだろう。極東ロシアに進出しなくてよかった」と思ったものである。それでも2005年、私は吉林省琿春へ工場進出した。琿春への進出理由は華中の工場が、人手不足で運営が難しくなったためである。詳細については文末の付記②を読んでいただきたい。そして今度はこの琿春工場のためにロシア市場の開拓を目指して、2006年にモスクワへ出かけることになった。→参照：付記③。また2007年にはロシアのユダヤ自治州に行き、そこの副州長と会ってみたい。→参照：付記④。このように足掛け8年、私はなんどもロシアに切り込もうとしたが、結局、その厚い壁を乗り越えることはできなかった。

この琿春から東寧へは地図上ではすぐ近くだが、実際には悪路を6時間ほど走らなければならないということだったので、残念ながら肖洪有先生のお見舞いに行くことはできずじまいだった。

2. 東寧の近況

2009年4月、私は黒龍江省牡丹江市の経済顧問を委嘱された。知人から、「ぜひ牡丹江のために力を貸してくれ」と頼まれたので、あまり力にはなれないがと思いながらも引き受けすることにした。委嘱状を受領するために牡丹江まで出かけることになったので、そのついでに、東寧の肖洪有先生のお見舞いに行くことにした。車で牡丹江から綏芬河まで2時間ほど、さらに1時間ほどで東寧に行けるということだった。私は牡丹江政府の関係者に案内してもらって走った。途中で綏芬河税関を見せてもらった。そこには原木がたくさん積んであったのでびっくりして、「原木輸入は採算が合わず、工場は壊滅したのではなかったのですか」と質問したところ、「いいえ、たくさん輸入しています。見ての通りです」という返事だった。私は今まで聞いていた情報と目の前の現実との差に、狐につつまれたような感じがした。ついで綏芬河の街中を案内してもらったところ、いたるところにロシア向け商品の店やレストランなどがあり、そこはすっかりロシア人の街になってしまったようだった。《 綏芬河のロシア街 》
街中にはロシア語看板が氾濫していた。



東寧に着き、税関の中を見せてもらった。ここは2級税関ということだったが立派だった。それもそのはず、1級税関の綏芬河よりも通過する人員も多く、物量も多いというのだ。それにはびっくりした。理由を聞いてみると、「ここからウラジオまでは1時間半で行け、一番近いのです。また2級税関のほうがなにかと融通が利きますから」という答えが返ってきた。ひっきりなしに通るコンテナやバスを見て、その答えに納得した。08年度は75万人が東寧税関を通ったという。次に木材工場に案内してもらった。そこでも大量の原木を見たので、先ほどと同じ質問をしてみたところ、「原木のまま輸入し、中国側で90%加工してから再輸出し、ロシア側の工場で10%の



《 東寧税関 》

加工をしている。こうすればロシアの税金も中国の税金もクリアーできる。ロシア側の工場には中国人の技術者が大量に派遣されているので品質問題もない」と説明をしてくれた。それまでの疑問はこの答えで一気に氷解した。確かに輸出関税はかなり上がったが、中国人はその上を行く工夫をしていたのである。しかも今まで聞いていた情報とは反対に、現実には中国人労働者が大量にロシア側に入り込んでいたのである。

夕方になって、この仕組みを作った黒竜江華宇(集団)有限公司の紀文楠董事長に会うことができた。彼は2000年から対露国境貿易に従事し、一人で担ぎ屋からはじめ、約5年という短期間で黒龍江省トップの財閥になり、中国の500強企業にランクインしたという。彼は私の差し出した小島衣料グループのパンフレットに目を通して、やおら切り出した。彼はウラジオから韓国人が去ったので、すぐに進出し靴の製造をはじめたというのだ。そして次のように付け加えた。「本当はロシアクォータを使った対米アパレル輸出がやりたかった。あなたと会うのが遅すぎた」と。この言葉を聴いたとき私は自分の耳を疑った。私が真顔で聞きなおすと、「アパレル業をやりたかったのだがノウハウとパートナーがなかったので、米国アパレル市場進出をあきらめた。そしてやりやすかった靴をまず始め、ロシアに靴工場を作りロシア市場に靴販売のルートを作ることにした。その靴の工場には中国人労働者を連れていったので、品質がよく馬鹿売れした。その後木材加工の工場をやるようになった。ロシアでも“上に政策あれば下に対策あり”です」と機嫌よく話してくれた。

それらの事業が爆発的に成長したので、さらに東寧税関を利用した物流事業を大々的に進めたという。大学でロシア語を学んだ奥さんにロシア国籍を取らせているので、ロシア側の事業も円滑に進んでいるという。その晩、宴会の席上で牡丹江市の幹部からも、対露農業進出の話聞いた。牡丹江市がロシア側に巨大農地を借り受け、大勢の中国人労働者を送り込んで農業に従事しているというのである。これらの話を聞いていて、私は自分が今まで入手していた情報がかなり間違っただけのものであったことがわかったし、現場で生の情報を収集することが本当に大事だと思った。

3. 残念、大儲けのチャンスを逃す。

私が2001年にこの紀さんと出会っていれば、対米・対露ともに大成功し、私は大儲けしていただろう。肖洪有先生の東寧の地縁を活かせなかったのは、かえすがえすも残念であった。せっかく現場近くまで足を運びながら、また同じ考えを持った紀さんがすぐ側にいながら、あと一步の詰めが足りなかったために彼に出会えなかったのである。また情報を現地で確かめず、間違っただけのものを鵜呑みにしていたことにもチャンスをつかめなかった原因がある。今から考えてみれば、韓国人が撤退したときがチャンスだったのである。あのとき「韓国人でさえ撤退したのだから」と、しり込みしてしまったのが敗因であった。「なぜ韓国人が撤退したのだろうか。なぜ中国人の靴屋が成功し



《 肖洪有先生との再会 》

ているのだろうか」と、突っ込んでいけば、そこに紀さんとの出会いがあったはずである。そうしていれば対米貿易で大儲けでき、さらに紀さんの靴の販売ルートに衣服を乗せロシア市場の開拓ができたはずである。

これができなかったのは、最後の詰めが甘く、あきらめやすいという私の悪い性格の所為である。残念だが、いつまでも口惜しがっていても仕方がないので、「人生とはこのようなミスマッチの連続である。あのときの私は運がなかった」と思って、潔くあきらめることにした。

午後4時ごろ、東寧の肖洪有先生のマンションを訪ねた。先生はベッドの上に正座して私を待っておられた。娘さんの話によれば、先生は午前中からずっとその姿勢だったという。言葉は不自由だったが、目にいっぱいうれしさをたたえて私を迎えてくださった。私は先生の手を取りながら、自分の無力さのゆえに先生の人生に最後の花を咲かせることができなかったことを詫言した。

付記を参照するには ctrl を押しながらリンクをクリック

付記②「わが社が珲春市に進出した理由」
付記③「中・ロは本当に手を組むのか？」
付記④「ロシア:ユダヤ自治州視察記」

拙著「中国ありのまま仕事事情」P. 146より
既報 : 2007年4月4日 ニュースレターより
既報 : 2007年8月25日 ニュースレターより

北京での「被隔離」記

協力会会員・北京在住 小林治平

一時帰国をして5月20日に関西空港から北京に戻ったが、運悪く、としか言いようがないと思うが、搭乗席が近くの乗客が発熱状態にあると検疫当局者に判断されたため、2日間「隔離専門」のホテルに宿泊させられてしまった。その状況をご紹介したいと思う。尚、今回の当方のこのケースの場合、正式には医学観察措置と言い、正式な隔離の場合は病院に入る事になる事をあとで知った。

19日に関西空港に向けて故郷の兵庫県北部の片田舎の街を離れる際には、ここも既にこのA型インフルエンザの事の騒ぎの最中であり、学校(幼稚園から高校まで)は全て休校、公的な施設は全て休館・閉鎖扱い、マスクはほとんど手に入らない状況となっていたので、自分自身の体調は良好で健康な状態にはあったが、今回のような事態に遭遇するという「悪い」予感があった。

利用した東方航空(MU)の便の利用客はそれでも6割程度はあったと記憶する。座席を決める際に席の希望を行ったところ、係りから北京行きの乗客は前列にかたまって座らせるよう指示されているというので、ここでもいやな予感がした。通常だとそのような事はない。搭乗便は青島経由北京行のため青島で検疫検査、入国審査手続きをする。大阪発北京行きの搭乗者は僅か7名であったが、その際にこの中に体温が高いと判断された人が一名いたようである。

(ようである、というのは事態がこのようになっている、という説明を全くしない、検疫担当者も航空会社の係員もしない・してくれないので推測、漏れ聞く話から推測するしかない)のでこのような表現になる) 青島到着後機内に乗り込んできた検疫担当が赤外線なのかビームを発射する小型の拳銃のようなものを額に照射して体温を測定した。これで即座に体温がわかるようである。

ここでこの一名の発熱者は収容されたのか、どこかに行ってしまい、6名がトランジットゆえに航空会社の先導の下にまとまって手続きをこなして出発ゲート近くまで案内されたのだが、ここでMUの係員が託送荷物があるか確認し、その託送荷物の番号を控えの記録票(CLAIM TAG)を提示させていちいち控えていたので、奇事な事をする、中国の航空会社としては珍しいとは感じたが、後になって思うとこの段階で北京に到着後は6名に対して観察措置を取る事が既に決まっていたようである。しかし、そのような説明は一切なかった(荷物は収容翌日の午後に航空会社がホテル迄直接配達をしてきた、旅具通関手続きはなし。) 青島ー北京間は機材は同じだが国内線扱いとなるため青島から乗り込んで来る国内の移動の乗客もある。それらの人々への影響を恐れてか、6名は一番後列の席に横並びで座らせられた。

北京到着後は白色の上下つなぎ式の防護服(デュポン社製)にゴーグル・マスクをした係員3名が乗り込んできて、6名の体温を同じくビーム照射式の器具で検査した。この段階でまた6名中一名の乗客の体温が高いと判断された。

余談だが、北京に到着後機内アナウンスで「この機材は大阪発の国際便で青島経由北京に到着した、従い検疫検査官が機内に入るので協力願いたい、暫くそのままお待ち願う」と中国語で放送するが、英語ではやらないのである。なぜ他のアナウンスと同じく英語もやらないのか、外国人(所謂西欧人、外観でわかるから)も前方に座っているのではないかと乗務員に言ったところ、タリフ(アナウンス用の文例集)にないから英語がうまい人でないと出来ないのだ、と言ったのにはあきれた。MUという会社はこの程度のレベルである。

青島から搭乗した乗客は先に全て降り、体温も高くないので、この段階で放免されるのかなと期待もしていたが(あなたはこのような状況にありますよ、というような説明は一切なし、かつ使用言語は中国語のみ)暫く待てというので待っていたら、機体に救急車が横付けされて(運転手も全身の防護服とマスク・ゴーグルを着用していた)全員に乘れとの指示で、そのまま空港から10分程度のところにある医学観察処置指定の京林大廈というホテルに収容された。ここで氏名・旅券番号・北京での滞在先・自覚症状の有無・感染者との接触の有無等を確認する書式を渡されて記入をして部屋に入る事になった。

後で思うと在中国大使館発信のインターネットのMLによる情報で、隔離検査的な扱いを受ける場合の具体的内容がホテル名も含めて情報が出ていたので、それによりある程度の心の準備的なものが出来

ており、心理的・感情的にあわてる事がなかったと思う。

私は中国語はそこそこ解するつもりでいるが、重大な事態が発生したときに重要事項を聞き漏らす事を恐れる。知ったかぶりをして後で面倒な事になる、という経験はよくあることだからである。そこで部屋に入るための手続きをした際に自らの手持ちの紙に中国語で、検疫の重要性は理解するが①当方の受け入れる事の出来る言語による事態の説明を望む ②在中国日本大使館領事部の領事相談員と連絡を取ってほしい、と電話番号を書いて渡した。しかし帰宅が許される迄の間に何らの説明はなかったし、領事部と連絡は翌日ホテルのスタッフ（と思われる、全員が白衣を着用しており名札等はつけていないので所属が不明）が部屋の電話がつながっている、利用できるのだから自分で連絡するようにと「断り」を言ってきた。

ホテルでの状況：

- ・ホテル：通常の普通のホテル。部屋内部に特別の道具等がある訳ではない。
- ・食事は三食ともに弁当とスープを部屋まで配達。果物の差し入れもあり。味は悪くはないが、中国での生活経験のない外国人には食べにくい内容と感じた。
- ・インターネット：可能。部屋に入るときにパソコン保持の確認もせず、接続の線のみの提供をしてきた。
- ・電話：可能。この電話で大使館のA型インフレ対策の担当者に連絡をし、この担当から事態の説明を教えてもらう。北京市衛生局が処置の担当部門であり、日本人の場合は大使館に通知が来ることになっているとの事を聞く。
- ・テレビ：通常の中国のチャンネルの視聴が可能。衛星放送受信による外国語チャンネルはなし。
- ・ラジオ：空港が近いのか少し雑音が入るがNHKの短波による日本語・中国語放送が明瞭に聴取できる。
- ・午前、午後の体温検査を実施。しかし、その結果や全体の状況についての説明は一切なし。
- ・水：蛇口をひねると暫く黄色い水が出てくるといふ、従来の中国のホテルのレベル。
- ・周囲は公安・警備担当者が固めており、逃げ出す事が出来ないようになっている。
- ・写真：撮影可。特に規制はなかった。

終章：

二泊した22日の昼前にスタッフがやってきて、午後2時発で帰宅が許されると連絡してきた。

大使館の担当者の電話による情報で、発熱した乗客の検査が終わり、感染していない事が判明すれば医学観察は終了になるだろうと予め聞いており、そのようになったのだろうと理解。

やや出発が遅れたが東直門までの送迎の乗用車で他1名の被収容者と同席で帰宅の途へ。ホテル出発前に「医学観察」を解除したという証明書を貰う（中国語による表記のみ）。

問題点 感じた事：

中国の当局が起きている事態・処置の状況の説明、法的根拠等、の説明を全くしない事、これに尽きる。

特に外国人には本国人と言語・習慣が異なる事の認識と配慮が全くといっていいほど、ない。

日本大使館の情報によると、今回の新型インフレの流行で、中国旅行に初めてきて収容された人があったそうだが、そのような場合ほんとうに心細い事で、情緒の安定に問題をきたしても無理ないのではと思えるような状況がある。

中国では「走出去」「走向世界」「面向世界」というような言葉をよく耳にするのであるが、外の世界を理解すると同時に、外の世界に自らの状況を理解してもらい、即ち「自らの情報を出す」という事に慣れていない、過度に規制をしてしまう中国と中国人の姿、失礼な言い方だが「よそを知らない田舎者」のそしりを免れぬ姿を私はこの京林大廈で見たと感じた。

とはいえ、日本・日本人がそれがうまく出来ているとは無論思わない。思わないが常に異なる文化を理解し、尊重する姿勢は持ち続ける事は提唱したいし、自戒の念にしたいと思う。今回の件では、「他山の石」中国に感謝しなければならないと思っている。

(09.05.31 記)

【中国経済最新統計】（試行版）

上海センターは、協力会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることになりましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。編集者より

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増 加 率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^{ドル})	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
1 月			21.2	7.1		194	26.5	27.6	▲13.4	109.8	18.9	16.7
2 月		(15.4)	19.1	8.7	(24.3)	82	6.3	35.6	▲38.0	38.3	17.4	15.7
3 月	10.6	17.8	21.5	8.3	27.3	131	30.3	24.9	▲28.1	39.6	16.2	14.8
4 月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5 月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6 月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7 月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8 月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9 月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10 月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11 月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12 月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009 年												
1 月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2 月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3 月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4 月		7.3	14.8			131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0		

- 注：1.①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2.中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月と 2 月を合計した増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥―⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。
出所：①―⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。